< 巻頭言 >

「大分大学教職大学院研究報告」の Web ジャーナル化にあたって

大分大学教職大学院は、学部教育で培われた基本的知識と教育的指導力、また、学校教育現場における経験を通して蓄積した教育者としての資質能力を、教職大学院で学修する教育理論を基盤とする高度な教育実践力にまで高めた学校教員を輩出することで、地域の教育がかかえる課題の解決と将来の学校教育の発展に寄与することを基本理念としています。その理念に基づき、大学院生個々のニーズや関心、そして教職キャリアプランに応じた学修計画を立てることが可能なように教育課程を整備し、9つの履修プログラムを提示し、学校経営、授業開発（教科教育）、学級経営（生徒指導）、特別支援教育の4つの分野でプロフェッショナルを育成しています。

本教職大学院では、前述の基本理念に基づいた教育・研究の成果を公表するものの一つとして平成29年度（2017年度）より「大分大学教職大学院研究報告」を刊行し、今号で第8号となります。本誌は、「教育実践研究報告書」、「実践報告」、「教育研究資料」で構成されています。「教育実践研究報告書」は、教職大学院の院生が省察科目「教育実践研究報告書」において教職大学院の学修の集大成として作成したものです。「実践報告」は、優れた教育実践または学校経営実践に関する報告です。「教育研究資料」は、教育研究に関する資料です。

今号（第8号）もその中心は、令和7年3月に本教職大学院を修了する16名（学部卒院生10名、現職教員院生6名）による「教育実践研究報告」です。これは、2年間の教職大学院での学修の集大成ではありますが、それぞれの院生の4月からの学校現場での実践に架橋することが期待されるものであり、そうでなければなりません。本誌に掲載されている「教育実践研究報告」は、「理論と実践の往還」を具現化したものになっていますでしょうか？ それぞれの大学院生は高度な実践力を修得したと言えますでしょうか？

さて、本誌の使命をより広く世に問うために「大分大学教職大学院研究報告」は、今号より Web ジャーナル化されました。このため、今まで以上に研究倫理に敏感にならざるを得ませんでした。本誌に投稿する者（単著における著者及び共著における筆頭著者とすべての連名著者）は、研究倫理教育の受講が義務付けられています。それは以下のようなものです。

- ① 最新の「公正研究推進ハンドブック」の通読
- ② 大分大学が開催する「コンプライアンス教育(研修)」の受講
- ③ 日本学術振興会が提供する「研究倫理 e ラーニングコース:eL Core」の受講

これらは通読、受講すればそれでよいということではないのは自明の理です。自らの実践と研究に関わる行為と照合し、省察する必要があります。

例えば、その研究は、その地域で、その学校で、その学級で、その先生の参加によって、その子供の参加によって行なわれる必要があるのでしょうか？ 教職大学院の実習科目を行なっている現任校だから、連携協力校だから、ということでは理由にはならないでしょう。その研究は、地域、学校、学級、先生、子供にどんな利益をもたらしているのでしょうか？ どんな贈り物をしたのでしょうか？ 大学院生の皆さんは、今一度、このことと向き合っ

みる必要があります。

また、原稿執筆にあたって子供や教師などによる生産物の写真を掲載されているのを目にすることがあります。この際に、個人情報の保護や配慮、そして掲載にあたっての説明と同意が必要なのは言うまでもありませんが、それと同時に(生産物の)著作権人格権の放棄に関する説明と同意が必要になることがあります。このようなことは研究に限らず、教育実践や学校経営の営みの中の多くの場面で直面することでもあります。安易に生産物の写真を示すことに頼るのではなく、「私の」言葉で事実を語ること、その解釈や考察を論じること、教育実践研究を「今、ここ」にとどまらずに、時間と空間と人間を超えて生かしていくために必要なことなのだと考えています。このことに関するトレーニングは、当然2年間で事足りるわけではなく、学校教育現場で揉まれてこそ意味あるものとなっていくと考えています。そしてそれは、私たち教職大学院教員だけではなく、在学生、そして修了生とともに取り組んでいく類のものでしょうし、そして何よりもこの歩みを進めていくためには、本教職大学院の教育・研究・実践活動を平素よりあたたかくご支援くださっている学校関係者、大分県教育委員会、市町村教育委員会等をはじめとする多くの方々からの今後とものご指導、ご支援により成立するものなのです。

改めてのご指導、ご支援の程をお願い申し上げるとともに、本教職大学院が、そして本教職大学院の教員や修了生が学校現場や教育委員会、そして地域にとって役に立つことを実践しているのかどうかに関しても厳しい目が必要なのだと考えています。それが理論と実践の往還や高度な実践力を言葉あそびに終わらずに、具体にしていくことにつながる道筋なのです。

大分大学大学院教育学研究科副研究科長
(研究科運営委員会委員長) 佐藤 晋治